タイトル：平成 26（2014）年度　教育セミナー（第 10 回）
日時：平成 26 年 9 月 20 日（土）～23 日（火・祝）
場所：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究　3 階　マルチメディア会議室（304）

相磯　尚子（慶應義塾大学大学院文学研究科史学専攻 ）

今回、私ははじめて自分の所属する大学以外のセミナーに参加しました。これまで全く学外に出たことがなかったので、自分のレベルでついて行けるのか、その場に馴染めるのかと不安に思い、緊張しながらの申し込みでした。しかし、いざ行ってみると、研究所のスタッフの方や先生方は我々がセミナーに集中できるように細かく配慮してくださり、参加者同士も含めて皆さんとても暖かく迎えてくださいました。
本セミナーを通して得られたことをいくつか述べたいと思います。
まず、同世代を含め多種多様な発表を伺えたことです。日頃は 16 世紀のオスマン朝を中心として歴史学分野で勉強している私にとって、地理学や言語学、地域研究のアプローチは非常に新鮮で、刺激的でした。また、同世代、とくに同じ修士課程 1 年の方々の発表を聞き、そのレベルの高さに大変刺激を受けました。
つぎに、すばらしい研究をなさってきた先生方から直接お話を伺える機会を得られたことです。セミナー中の講義を通して詳しく学ぶことができたのはもちろんですが、休憩時間や懇親会などオフィシャルでない形でもお話できたことが本当にありがたく思いました。自分が疑問に抱きつづけていた本当に些末なことを質問させていただいたり、自分のテーマについてかなり具体的にアドバイスを頂けたりしましたし、先生方のこれまでの体験談を伺え、充実した時間を過ごすことができました。最後の懇親会でスタッフの方の経験を伺いながら人生相談にのっていただけたことは、自分の将来を考える上で、今の自分の心の支えとなっています。
最後に、同じ中東地域やイスラームに興味をもって真剣に学んでいる同世代の仲間に出会えたことです。本セミナーに参加して共にがんばっていく「仲間」として出会えたことは、本当にかけがえのないものであると感じました。
本セミナーならではの良さは、その自由でありながら真剣な雰囲気にあると思います。特に、最終日にも述べましたが、質疑応答は緊張感がありながらも自由に聞ける雰囲気がとても良かったと感じました。参加者や先生方から出る質問の角度や着目点も非常に勉強になりましたし、聞き方、言葉の選び方や順番によっても返ってくる回答が変わってくるのだなということも体験的に学びました。
今回は質疑でしか直接的に参加できませんでしたが、来年度また機会があれば、今度は発表に挑戦したいと思いました。最後になりましたが、このような素敵なセミナーの機会を用意してくださった方々に感謝いたします。本当にありがとうございました。

市川 千乃（九州大学人文科学府歴史空間論専攻）

今回、私は指導教官の勧めで中東☆教育セミナーに参加させて頂きましたが、全体を通して大変貴重な体験をする事が出来ました。
私は所属する大学で歴史学を専攻していますが、セミナーには異なる分野の院生の方々が参加されると聞き、始めは少々不安に感じていました。しかし、実際には普段触れる機会がほとんどないテーマの研究に接する事が出来、自身の知識を広げる良い機会となりました。正直に申し上げれば、歴史学以外のテーマに関するセミナーや受講生の発表は理解するのに精一杯で、自身の勉強不足を痛感しました。しかし、他の受講生の方々の積極的な質問や先生方のご指摘を聞く事によって、自分なりに少しばかり理解する事が出来たのではないかと思います。
また、受講生の方々の発表は歴史学に関するものが多く、大変興味深く聞かせて頂きました。そして、それらの発表に対する先生方のアドバイスは自身の研究に直接関わる事が多く、大変勉強になりました。それと同時に、歴史学だけにとどまらず、視野をより広げて研究を行なわなければならないという事も改めて実感しました。
更に、セミナー全体を通して多くの受講生と接する事で、研究に関する様々な情報を交換する事が出来ました。九州大学に在籍する私にとっては、同様の研究を行なっている大学院生と交流する機会はあまり無く、これはとても貴重な機会となりました。その中で、皆様の研究に対する姿勢や手法などを学び、これまで気づかなかった視点を発見する事が出来たので、これからの自身の研究につなげていきたいと考えています。また、今回学んだ受講生の皆様の積極的な姿勢や質問の方法など、大学での普段の授業で少しでも取り入れて行きたいと思います。
最後になりますが、セミナーに携わって下さった先生方、受講生の皆様、そして、セミナー全体を通してお世話をして下さった千葉さんに心から感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

金 信遇（上智大学大学院グローバル・スタディーズ研究科地域研究専攻）

大学院に入学して半年しか経っていなかった 2014 年の夏に参加した中東☆イスラーム教育セミナーは、研究者としても人間としても大きな刺激を与えられた貴重な時間だった。朝から夕方までというかなりストイックなスケジュールではあったが、緑豊かな外大のキャンパスで多くの先生方と同じ大学院生たちに囲まれて過ごした密度の高い四日間のセミナーで、私は次のものを得ることができた。

まず、中東・イスラーム地域に関する幅広い知識を身につけることができた。普段の大学院生活ではどうしても関心分野の近い人たちで集まり、勉強内容にも偏りが生じやすい。本セミナーでは、先生方の講義や受講生による研究発表を通じて、多様なディシプリン・時代・フィールドに関しての知識と考察力を得ることができ、「中東・イスラーム世界」を総合的に考える力を身につけることができた。大学院時代は自分の専門分野を深く掘り下げることも重要だが、もっと大きな枠組みから研究領域を考える思考力も必要だと思う。最初にプログラムを見たときはあまりにも研究分野や時代が自分のそれとは離れており、しっかり勉強できるか心配だったが、研究者としての思考力を身につけることができたとともに、多様な研究方法を学ぶことで、これからの自分の研究へのヒントが得られ続けるわくわくする時間の連続だった。

次に、同じ中東・イスラーム地域を研究する大学院生同士の横のつながりができた。大学院での研究会では先輩や先生方との縦のつながりは持つことができても、同じ分野を研究する修士課程のつながりはなかなか持つことが難しかった。本セミナーを通じて、中東・イスラーム研究者を志している 20 人をも超える他大の大学院生にあうことで、よき仲間、よきライバルとして共感と刺激を得ることができた。休み時間やセミナー後の懇親会などでたくさんの受講生と、普段の悩みや自分の研究、経験について話し合うことで、視野が広がるとともに、もっと頑張りたいという高いモチベーションをも得ることができた。

最後に、研究者としての生き方を垣間見ることができた。普段はテキストで名前を見ることしかできないような各分野の著名な先生方が、受講生たちと積極的にコミュニケーションを取ってくださったり、先生方同士の経験談や思い出話なども聞かせてくださったりすることで、研究者として生きていくということをイメージすることができた。漠然とした将来に不安を感じたり、具体的にはどういう生き方をしていけばいいのか悩むことの多い大学院生活だが、本セミナーで先生方とたくさんお話することで、研究者としての生き方が少しはわかるようになった。

最後の打ち上げの帰り道にある先生からいただいた研究生活に関するアドバイスは未だに忘れることができない。もっと成長した姿で他の研究会や来年の教育セミナーで再会できることを強く願っている。このように貴重な機会をくださった先生方、スタッフの皆様、そして千葉様にお礼を申し上げたい。

齋藤 秋生子（上智大学大学院グローバル・スタディーズ研究科地域研究専攻）

今回、私は初めて中東☆イスラーム教育セミナーに参加した。大学院入学前から本セミナーの存在を知っており、進学した際には参加したいとずっと思っていたが、予想以上に貴重な経験をすることができた。それは大きく分けて以下の 3 つである。

第一に、研究発表をした院生 6 人のうち、半数の 3 人が私と同じ修士課程 1 年に在籍していたことによる衝撃と刺激である。私は学部時代と現在の研究テーマがかなり違うこともあり、現段階では発表をするにはまだ早い、修士論文を提出する直前の来年度のセミナーで発表すればよいと高をくくっていた。しかし、特に修士課程 1 年の院生の完成度の高い発表を聞き、自分の甘さを思い知らされた。これはショックでもあったが、それ以上に今後の研究のモチベーションを大いに刺激するものだった。もちろん、修士課程 2 年や博士課程に在籍する院生の発表もまた興味深く刺激的で、先生方のセミナーはいずれ自分が人に教える立場になったときの目標にしたいと思わせるものばかりであった。

第二に、自分と同じ修士課程、それも自分と研究する時代や地域の違う院生との交流の場を持つことができたことである。私は現代のリビア政治を専門にしており、また所属する研究科では、中東を専攻する院生は現代研究をする人がほとんどで、その多くは博士課程に在籍している。一方、今回のセミナー参加者は大多数が歴史学を専攻する修士課程の院生で、地域もマシュリクやオスマン帝国が多いなど、普段私が身を置く環境とはかなり異なっていた。現代の紛争地域を研究している私は、日々移り変わる情勢のフォローに追われ、「すぐに役に立つ」情報に寄りがちなところがある。しかし、今回のセミナーで、現代にも影響を及ぼしている過去の歴史を研究することの重要性を再認識し、それまでの自分の姿勢を反省することができた。また、同じ修士課程の院生と交流し、情報交換をしたり、研究をすることの悩みを共有したりすることができたことも、このセミナーならではのことだろう。

最後に、活発な質疑応答の場を与えられたことである。私は自分の大学が主催する研究会やシンポジウムに学部時代から参加していたが、質疑応答の時間には遠慮、萎縮してしまっていた。しかしこのセミナーでは、同じ研究者の卵が参加していることもあり、それまで引っ込み思案だった私も何度か質問をすることができた。セミナーの数日後に行われた自分の大学の研究合宿においても議論に参加することができたのだが、おそらくこれは本セミナーでの質疑応答で殻を破ることができたからだと思う。

来年度も、機会があれば参加させていただきたいことはもちろん、中東やイスラームに興味のある友人や後輩にも是非勧めたいセミナーであった。

改めて、貴重な機会を与えてくださったスタッフの先生方、事務局の千葉様、そして参加者の皆様に深くお礼を申し上げます。

仲本　響（九州大学人文科学府歴史空間論専攻）

私が本セミナーへの参加を決定したのは、指導教官である小笠原先生が勧めてくださったことがきっかけです。昨年末にオスマン文書セミナーに参加した経験から、普段勉強をしている研究室を飛び出して、様々な研究者の方が集まる研究の世界に触れることの意義を強く感じていたこと、また、修士論文の執筆を控えて自身の視野が狭くなっていると自覚していたことから、今回、参加を決めました。

以下、セミナーの感想を述べることで、来年度以降セミナーへの参加を検討される方の参考になればと思います。

まず、講師の先生方によるセミナーは、大変勉強になるものでした。普段どおり、自身の興味関心に沿って勉強するだけではほとんど触れることのなかった問題について、広く学ぶことができました。自身の専門に近い領域に関しても、先生方ご自身からお話を伺うことができ、疑問に思った点や単純に知りたいと思った点に直接答えていただける機会は、大変貴重なものだと感じました。

受講生の方の研究発表に関しては、同世代の方が発表をされていたことに非常に刺激を受けました。優れた研究発表を聞くことで、自身の研究を省みることができ、更にモチベーションを上げることができることも、本セミナーに参加することの大きなメリットであると考えます。私は、今回発表してくださった受講生の皆様の優れた研究発表を聞きながら、すぐにでも福岡に帰り、自身の研究を進めたくなってしまいました。大学院生のなかには、普段接する方のなかに同世代が非常に少ない、という方もいらっしゃると思います。そのなかには、現段階でどこまでを目標にすればいいのかわからず漠然とした不安を感じている方もいるのではないでしょうか。そのような方にとっては、同世代の方から刺激を受けるよい機会になるのではないかと感じます。

また、セミナーの後に開かれた懇親会では、様々な方とざっくばらんにお話できることも嬉しいことでした。研究発表を行わなかった方の研究内容を伺うことができましたし、大学院生同士、具体的な勉強の進め方について相談し合うのも楽しい時間でした。自分と興味関心が近い人とも、また異なる人とも、情報交換をしたり交流したりする機会は、こういう場でないとなかなか得ることができないと思います。

本セミナーを受講してみて、もっと早い段階で参加しておけばよかったと悔やむところもありました。活発に研究をされている方々のコミュニティに参加してみることで、一人ではなかなか得ることが難しい活力を得ることができると感じたのがその理由です。迷っている方は、ぜひ思い切って、早い段階で参加を検討されてはいかがでしょうか。

最後に、本セミナーの運営に関わってくださった方々、講師の先生方、受講者の方々、皆様に感謝の意を表したいと思います。このような貴重な機会を設けていただき、本当にありがとうございました。今後の皆様のご活躍と、イスラーム☆教育セミナーのご発展をお祈り申し上げます。

馬場　智也（明治大学大学院商学研究科商学専攻）

私が今回の「中東☆イスラーム教育セミナー」に参加するきっかけは、大学院の掲示板に張ってあったポスターを見たことでした。今まで、私は大学以外の集まりに参加することが少なかったこともあり、また教育セミナーということで敷居が低いと感じたこともあって、応募しました。

もともと私は貿易論を専攻し、経済的な側面から中東世界及び、世界全体を見ることの重要性を学んできました。とはいえ、イスラーム文化や歴史に対して体系的に学んできたわけではありませんでした。また、あまり学外の方と話す機会や発表を聞く機会も少なかったため、ちょうどいい機会だと思いました。今回、参加するにあたり自身の問題意識を再確認しました。

私の現在の問題意識はエジプトに留学していた経験からきています。そもそも私は 2013 年、エジプトに滞在しておりました。当初の目的では、エジプトに一年間滞在し現地の言葉や生活を体感し、修士論文の研究に結び付けようと考えていました。しかし、2013 年 7 月ムルシー大統領を強制排除し、軍事クーデターが成立しました。その過程の中に身を置いていた私は周囲のエジプト人の言動について違和感を覚えました。また、自分自身も軍とデモ隊の抗争を目撃してきました。そうした経験を踏まえ、エジプトで何が起こっているのか、エジプトを含む中東・イスラーム世界はどういった存在であるのか。そういった問題意識を強く持つようになりました。

もともとはエジプトの経済構造に興味がありました。というのも「アラブの春」の要因として、リーマン・ショック以降、世界中に様々な形で波及した経済危機が影響を及ぼしていたのではないかと考えていたからです。しかし、大きな広がりを持つ中東・イスラーム世界に身を置いたことで、複雑な歴史や文化についても知っておかなければと言う思いが強まりました。

今回、様々な視点、地域、時代の発表があり、理解するのが難しいものもありましたがなんとかついていくことができました。というのも、参加してくださった諸先生方が発表者に対するフォローや解説をしてくださったからです。また、ゲストの先生方の発表も非常に面白く、研究者の姿勢やその人の背景が見えてきて非常に勉強になりました。

最後になりますが、今回、発表してくださったすべての方、また会場の設営や運営を行ってくださったすべての方に厚く御礼申し上げたいと思います。本当にありがとうございました。

原 千尋（日本女子大学大学院文学研究科史学専攻）

私は大学院でお世話になっている先生方から、この「中東☆イスラーム教育セミナー」について教えて頂きました。
私の所属している大学院には、中東関係のテーマを取り扱っている学生は残念ながらほとんどおりません。これは面白そうだと思った反面、今の私には他の受講生の方ほどの研究の蓄積もなく、こういったセミナーへの参加経験もあまりなかったので、躊躇いもありました。しかし、「折角大学院に進学したのだから、普段はご一緒できない方々の発表を聞かせて頂いたり、専門の先生方のお話を伺ったりしてみたい」と思い、緊張しつつも参加させて頂くことに決めました。
これまでは自分の研究テーマである、15～16 世紀におけるオスマン帝国と周辺国の歴史や文化についての勉強ばかりしていて、近代史や言語、トルコ以外の国の歴史などにはあまり触れる機会がなかった私にとって、参加された受講生の方々や先生方による様々なテーマの発表は、とても新鮮かつ刺激的な内容のものばかりでした。それぞれの発表内容の濃さに圧倒されると同時に、自分の知識の偏り具合や勉強不足も実感しましたが、たくさんの発表を聞くことができて本当に良かったです。また、それぞれの発表に対する鋭い質問や感想、先生方からのアドバイスやご指摘などがたくさん出てきたのには驚きました。
そういった部分も含めて、普段の大学院のゼミでは経験できないような、内容の濃く大変充実した時間を過ごすことができた 4 日間でした。自分の研究している分野の他にも、こんなに面白く興味深い世界がたくさん広がっているのだと知ることができましたし、大勢の先生方や同じ中東・イスラームに関する研究を進めている受講生の方々とも間近で会話を交わすことができるのも、このセミナーの醍醐味の 1 つだと感じています。
遠方からの参加だったため、セミナー後の飲み会や打ち上げに参加できなかったことだけは非常に残念ですが、今回のセミナーで得ることができた様々な知識や貴重な経験の数々は、これからの私の糧になってくれるものと信じています。
最後になりましたが、このような機会を設けてくださったスタッフの方々、諸先生方、参加された受講生の皆様、この度は本当にありがとうございました。

藤原　達也（麗澤大学大学院経済研究科経済学・経営学専攻）

初めて参加させて頂いた「中東☆イスラーム教育セミナー」を振り返ってみると、参加の前後で、自身の中でセミナーの印象が大きく変化したと感じています。結論を先に言ってしまえば、このセミナーに参加したことで多くの知見を得ることができ、大変満足しています。参加する前までは、「イスラームの右も左もわからない私が参加しても良いのだろうか」、「経営学を専攻している私では場違いではないか」と考えていました。イスラームのハラル食品の研究を始めたばかりであった私は、このような不安を抱えながら、本セミナーに臨んだのです。しかし、終えてみると不安な気持ちは払拭されており、逆に自身の中には達成感や満足感がありました。何故、このような感情の変化が生じたのでしょうか。その理由を考えたとき、次の 3 つの柱が「中東☆イスラーム教育セミナー」にはあったのではないかと思います。

1 つ目の柱に、セミナーが様々な研究分野の講義や発表で構成されていることです。自身の研究分野以外からは、実りあるものは得られないと考えていましたが、先生方の講義や学生たちの発表から多くの視座を頂きました。特に研究方法については、フィールドワークの重要性を学びました。イスラームを研究する上で、現地の状況、文化、慣習を肌で感じることが必要であり、そこに研究の醍醐味があることを知りました。

2 つ目に、学生たちに発表の機会を与えてくれていることです。セミナーと聞くと、一般に講義を聴いているだけのイメージを持ちますが、学生の発表を盛り込むことで、学生たちの意見交換を促す仕掛けになっていると感じます。事実、自分が所属する大学院以外の学生たちと意見を交えることで、同世代の研究者として刺激を受けることができました。多種多様な考え方に触れ、自身の見地が広まったことを感じています。

最後に、先生や学生という垣根を越えて親睦の場を提供していることです。4 日間のセミナーを通して、そのような場を随所に設けて頂いたため、日を追うごとに親睦が深まっていきました。今回出会うことのできた先生方や学生たちとの繋がりが、私にとって一番の収穫となりました。

私見ではありますが、以上の 3 つの柱があったからこそ、「中東☆イスラーム教育セミナー」にて、私は、貴重な経験を得ることができました。不安な気持ちを持ちながらも、セミナーへの参加を決めたことは、本当に良い決断であったと強く感じています。次のステップとしては、私自身が研究発表をする番であると考えています。今回の経験を踏まえ、多くの方々から頂いたご助言を基に研究に邁進していきたいと思います。また、同じく中東・イスラームに興味を持っている学生たちにも自身と同じ経験をして頂きたいと切に思う次第です。

末筆ながら、本セミナーを通じてお会いできた全ての方々に心より感謝申し上げます。

堀谷 加佳留（東京外国語大学大学院総合国際学研究科）

学部からそのまま東京外国語大学の大学院に進んでこれから研究を進めていく中で学外の多くの中東・イスラームという括りのご専門の先生、研究者、大学院生の方々の発表に立ちあうことができるというのは大変に貴重な機会だと考えて、セミナーに参加しました。
今回の一連の発表は参加されている院生の皆さんは歴史学を専攻されている方が多く歴史学の分野のものが多かったのですが他にも言語学、社会学、政治学系統の発表もあり改めて現在の中東・イスラーム研究のアプローチの多様さ、その内容の豊饒さを当然のことながら目の当たりにできて非常に刺激的な4日間でした。今まで勉強してきたことから何かしら討議にも参加できるだろうと思って臨んだものの実際には、自分の専門の領域の現代トルコに関する澤江先生や小川さんの発表でも、今迄深くは意識していなかったような新たなパースペクティブを提示するもので新鮮さを持って受け止める他、何もコメントをしたり突っ込んだ質問をすることは出来ませんでした。
初日の澤江先生の発表は現在のトルコ政治から所謂『ポスト・イスラム主義』とよばれるものの内実を他の研究者の見方も紹介しつつ考察する発表でしたが、たとえばトルコ語新聞のコラムなどでこの語を目にしても日常的にはあまり深く気に留めてはいなかったので改めてこのような言説に注意深くならなくてはと意識を新たにしました。
4日間を通して、参加者の間で非常に活発に意見が交わされて討議が深まっていたのが印象的でした。国際的に政治舞台はもとより様々な場面で「イスラーム」がその存在感を増しているように思える時代にこれから今まで以上に多様な、実社会の動きとコミットした
中東・イスラーム研究がなされていくと思います。そのような中でも今後もこのように有益な討議ができるセミナーのオープンな雰囲気が保たれることを願います。セミナー後の懇談会では打ち解けた雰囲気の中で、それぞれの研究の苦労話だったり現地のフィールド調査でのエピソードなどを聞くことができ非常に貴重で楽しい時間でした。

最後にこのような素晴らしい機会をご用意して下さった AA 研の先生方、事務局の千葉さん、スタッフの皆様に深くお礼申し上げます。どうも有難うございました。

李　旎（名古屋大学大学院国際言語文化研究科国際多元文化）

私は、今回２回目の中東☆イスラーム教育セミナーに参加させて頂いて、心から感謝致します。毎日のセミナー内容は、非常に豊かで、自分の知らないことばかりで、大変勉強になったと共に、今後の研究の方向性を考える上でも大変貴重なセミナーです。

二回目の参加なので、一層このセミナーの意義を体験できたと思います。

まずは、担当の先生たちと受講生たちの研究分野が、多様で、例えば、政治的な研究、文化的な研究、歴史的な研究、言語の研究、イスラーム法の研究、宗教の研究等です。そこから、自分の研究内容を超えた知識を得ることができるようになりました。自分にとって、個人的に一番印象を残っているのは、桜井先生の「現代イランの宗教教育—ホウゼを中心に」についてのセミナーです。本当に聞いていた間、遠いイランにトリップした感じでした。もともとイランのことについて、殆ど何も知らない私は、このセミナーのおかげで、イランの宗教教育とは、何かは、少しわかるようになりました。また、女性の宗教教育、留学生の宗教教育及び現在の宗教学院のネットワークまでも詳しく紹介していただき、イランに関する知識だけではなく、研究に対する慎重的な態度も、自分にとって非常に勉強になりました。

次は、コミュニケーションです。中東☆イスラームに関する研究は、もともとマイノリティ的な研究ですので、特に私の場合、周り中東地域研究の人が全然居ないですので、このセミナーは、中東☆イスラーム研究の人々がお互いに知り合って、コミュニケーションを取れる場を提供していると思います。講師の先生たちだけではなく、自分と同じ中東に興味を持つ受講生の仲間に出会うことも、とても大事です。いつも一人で勉強する私にとって、仲間を得るチャンスを頂きました。更に、去年一緒に参加した仲間も、同じ2回目の参加ですので、また一緒に受講できるようになったので、すごく嬉しかったです。

それに、何よりもショックを受けることです。このセミナーを参加することで、他人の研究は、どのように行っているのか、また専門家である先生たちから、どのようなコメントをもらえるのか、その場で、実感できました。先生たちの質問や、コメントは、全然厳しくないですが、やはり自分から、自分の研究を問うようになり、反省するようになりました。受講生の発表と先生たちのコメントを聞いて、「自分の研究もこのような問題があります」と常に反省しています。特に自分の先行研究が足りないことは、今回のセミナーのおかげで、すごく痛感しました。そして、何のために、研究を続くのか、つまり、研究の目的と意義が何なのかという問題は、ちゃんと頭に入れるようになりました。とてもいいショックを受けて、ありがとうございました。

文末ですが、いつも丁寧に説明していただいた事務局の千葉様、講義を担当した先生方、このセミナーを参加する受講生の皆様に心から感謝致します。また、中東やイスラームについて興味を持つ方は、次回是非参加してみてください。

M・S（東京大学大学院総合文化研究科）

大学の友人に誘われて、締切りが過ぎているのにもかかわらず、急きょ参加させていただくことになった中東☆イスラーム教育セミナー。
大学 4 年間は国際関係学や紛争解決・平和構築を学び、大学院からようやく自分が関心を持っている中東地域の研究を志した私にとって、この教育セミナーは大変有意義なものでした。
これまでは言語・資料・知識に限界があったため、理論やケーススタディが主だったのですが、今回の受講者の多くが歴史研究をされていたので、彼ら・彼女らの内容の濃い発表を聞くことは、地域研究をしていく上でどのようなスキルが求められるのか、どのような研究方法が適当なのかなど、そういったテクニカルな部分を学ぶいい機会となりました。そうした発表に対する他の受講者や先生方の質疑やコメント・フォローなども、非常にクリティカルで刺激的なものが多く、今後修論を執筆していくに当たり重要な点を確認できるいい機会となりました。同時に、先生方や受講者の発表や質疑応答を聞いていて、自分の視野の狭さや勉強不足を痛烈に感じました。常日頃、視野を広く持とうと意識はしても、つい自分の関心のある分野や議論しやすいトピックにばかり目が行きがちな私にとって、他分野の方々との交流は視野を広く持つことの大切さを再認識させてくれました。
今回の教育セミナーを通じて、言語・資料・知識の限界を超えて、いかに物事をもっと深く、かつ面白く捉えることが重要であるか、というのを感じました。この 4 日間の経験を糧に、今回発表された受講者の方々に負けないくらい、自分自身も皆さんに刺激を与えられるような面白く、この分野に貢献できるような研究をしたいと思いました。
最後に、ご講義・ご指導をして下さった先生方、締切りを過ぎての応募にもかかわらず参加させてくださった事務局の千葉さんに深くお礼を申し上げます。ありがとうございました。